

囚われの君を愛し抜くから

目次

囚われの君を愛し抜くから

5

番外編 かわいすぎる君を愛し抜きたい

245

囚われの君を愛し抜くから

「え……？ そんな！ 私、辞退の電話なんてしていません。何かの手違いではないですか？」
雪のように白く透明感がある肌は、私、三枝美雪にとって自慢できる特徴の一つだと思っている。だが、その肌は今、青白くなっているだろう。

もう一つのチャームポイントである黒く艶やかな髪を肩先で揺らし、新入社員らしく濃紺のリクルートスーツ姿で立ちつくした私は目の前の現実には泣きそうになった。

現在、私がいるシャルルドリンク株式会社本社ビルでは入社式が行われている。

私も入社式に参加予定だった。それなのに――

ギョッとバッグの取っ手を力強く握りしめて、崩れ落ちそうな足を踏ん張る。

昨年秋には内定通知をもらい、間違いなく内定承諾書にサインをして捺印の上、送付した。

きちんと会社の方で受理されたからこそ、そのあとも人事担当者から連絡があったし、二月に行われた入社前研修にも参加できた。

研修時に渡されていた課題に取り組み、今日提出しつつ入社式という流れだったはず。

もちろん、課題はすべて済ませてあるので今すぐにでも提出はできる。

それなのに、どうしてこんなことになっているのだろうか。

啞然としたまま動けずにいる私を見て、困ったように受付の女性が首を捻った。

「そう言われましても……」

人事部の女性が困惑めいた表情を浮かべる。彼女の手には名簿があり、それには今日めでたく入社式を迎えた社員の名前がズラリと並んでいた。その名簿には私の名前が記載されているのだが、黒のボールペンで横線が引かれているのだ。出席しない人物、すなわち入社辞退した人物として。

気を緩めれば、すぐに涙が零れ落ちそうになっていることに気がつき必死に堪えたその瞬間、重厚な扉の向こうから、大きな拍手の音がした。

すでにホールでは、入社式が始まっている。

本来なら、皆と同じように私も社長の挨拶を聞いているはずだった。それなのに、どうしてこんなことになっているのか。一緒に研修を行った同期は、ホールの中。そして、私だけがホールの外だ。たった一つの扉が、とてつもなく重く高い壁のように見える。

ホールの扉を見つめていると、人事部課長だという男性がやってきた。どうやら、受付の女性が連絡を取ってくれたようだ。

「三枝美雪さんですね。人事部課長の平山と言います」

「三枝です。お世話になっています」

研修で一度、平山さんを見たことがあったはず。私は、慌てて頭を下げる。

すると、平山さんは硬い表情でロビーの隅にあるソファアを指差す。

「……ちよつと、そこでお話ししましょうか」

「はい」

私にとって絶望的な状況なのだと思ふ。

だが、簡単に引き下がれない。こちらとしては、未来がかかっているのだ。

コクンと喉を鳴らしたあと、彼に誘導されてソファーに座る。平山さんは私の向かいに座って深刻そうな表情で見つめてきた。

「まず、これまでの経緯を説明させていただきます」

「は、はい」

青ざめている私を見て、彼は憐れんだ目をしている。向こうにとつても不測の事態なのだろう。再びバッグの持ち手をギュッと握りしめていると、彼は重苦しい雰囲気でも口を開いた。

「三枝さんには、弊社の試験に合格された旨を電話と書類にて通知し、そのあと三枝さんから内定承諾書を郵送にて提出していただいたことで、弊社に入社していただく運びになっておりました」

「はい」

その通りだ。間違いない。返事をする、彼も同意を得たことを確認して頷いた。

「そのあと、内定式、入社前研修などもこなされておりましたことは、こちらもちろん把握しております。ですが……」

平山さんは、テーブルに書類を二枚置く。

一枚はメールをプリントアウトしたもの、そしてもう一枚はワープロソフトで作成されたと思わ

れる書類だ。それには、入社辞退届と書かれている。

「まず、弊社に三週間ほど前。三枝さんの携帯電話から連絡がございました。私は出張のため本社におらず、部下の女性が入社辞退の電話を受けました。女性からの電話だったことで、部下は三枝さんからの電話だと判断したようです」

こちらをご覧ください、とメールをプリントアウトしたものを差し出してくる。

「このメールは三枝さんからの電話があったあと、弊社の人事部に送られてきたメールです。こちらにも電話でお話ししてくださった内容と同じ文面が書かれており、送信者アドレスは三枝さんが弊社に提出してくださったアドレスと一致しております」

差し出された紙を確認すると、送信者アドレスは確かに私が常に使っているアドレスからのもので間違いなかった。咄然としてみると、平山さんはもう一枚書類を差し出してくる。

入社辞退届と書かれた書類だ。

硬直したまま書類を食い入るように見ていると、彼は困惑めいた表情のまま静かに口を開く。

「電話を受けたときに部下が話し合いの場を設けたいと申し出たのですが、すぐに入院しなければならなくなつたと言われまして、弊社に来ていただくことは叶わず……。しかし、なりすましの可能性も考えられたので、ご自宅に書面を送らせていただきました」

「え……」

そんな書類など見たことがない。呆然としている私に、彼は困ったように眉尻を下げる。

「ですが、残念ながら連絡が来ませんでした。その後も三枝さんの携帯電話に何度か連絡をさせて

いただきましたが、着信拒否になつていて繋がらず……。これ以上、無理を言うことはできないと判断して届け出を受理する運びとなりました」

会社としては、やれるべきことをすべてやってくれた。その上で、私は入社困難であると判断したはずだ。平山さんは、依然困惑めいた表情で口を開く。

「こうして三枝さんが辞退をしないとおっしゃっている以上、こちらとしてももう一度精査しなくてはならない問題だと思えます。ですが……現在の弊社の方針といたしましては、一度辞退を受理した以上取り下げはできないことになっております」

「……」

「私としてもなんとかしてあげたいのですが……。申し訳ありません」

私の愕然^{がくぜん}としている顔を見て、誰かに嵌^はめられたのではと悟つたのだろう。平山さんは、苦渋の顔で頭を下げてきた。

内定辞退関係について、昨今色々トラブルが起こっていることは耳にしている。だが、まさか自分がそんなトラブルに巻き込まれるなんて思いもしなかった。

シャルールドリンク側としても、何やらトラブルの香りがする人物をこれ以上引き留めない方針なのだろう。何を言っても無駄だということだけは理解した。

ギョツと手を握りしめて怒りと悲しみ、そして絶望を呑み込む。

ここにおいても入社式に出席することはおろか、入社もできない。渋^{しぶ}つたとしても、平山さんを困らせるだけだ。それに、三週間ほど前に辞退の連絡があつたとなれば、会社に多大な迷惑をかけた

はず。先程の名簿に私の名前が記載されていたのを見ると、本当にギリギリのタイミングだったのだろう。私には身に覚えのないこととはいえ、これ以上会社に迷惑をかける訳にはいかない。

よろけそうになる身体をなんとか持ち堪^{こた}え、ソファから腰を上げた。そして、平山さんに深くと頭を下げる。

「色々にご迷惑をおかけいたしました」

「いえ……。お力になれず、申し訳ありません」

彼も立ち上がり、頭を下げてくれた。

これまでのお礼を言つたあと、ロビーを抜けてビルの外へと出る。

先程まで、新しい季節の始まりだと心がウキウキしそうなほど輝いていた太陽が、この短時間で雲に隠れていた。黒く重そうな雲が光を遮り、空は今にも泣き出してしまいそう。まさに、今の私の心情を表しているかのようだ。

立っているのがやつとな状況の私は、今来た道を振り返ってビルを見上げる。

何度も、このオフィスビルには足を運んだ。

入社試験では足が震えるほど緊張したことを、今も鮮明に覚えている。

人気のある会社なので、求人倍率は相当なものだった。

だからこそ、合格通知が来たときは涙が出るほど嬉しかったのに……

今春、このオフィスビルで働くことを楽しみにしていたが、私を陥^{おとし}れたいと思つている人物によつて踏みにじられ、その夢も儚^{はかな}く消えてしまった。

「なんで、こんなことになっちゃったんだろう……」

視界が滲み、ドラマに出てきそうな近代的で素敵なオフィスビルが霞んでしまう。

沈みきった心のままに視線を落とし、ふらふらと歩き出す。

四月に入ったとはいえ、今日は朝から底冷えしていた。太陽が隠れてしまった今、肌寒さすら感じる。スプリングコートは腕にかけてあるから羽織ればいいのだが、今の私にはそんな気力もなかった。

(これから、どうしよう)

シャルルドリンク本社ビル前には小さな噴水があり、その周りにはベンチがいくつか置かれている。レンガ敷きの広場にはパンジーとチューリップが植わっており、香しき花の香りは華やかな春を演出していた。

もう少し暖かくなれば、昼休憩にここでランチを取る社員がたくさんいることだろう。

いずれは私もこのベンチでお弁当を広げ、同期社員とお昼を一緒にしたのかもしれない。

だが、もう……そんなOL生活を送ることができなくなってしまった。

崩れるように手近なベンチに座り込む。

力が抜けて動けない。頑ななまでに、この場から動きたくないと駄々をこねてしまいそうだ。

どれぐらいベンチに座っていただろうか。

入社式はとっくの昔に終わり、スケジュール通りなら新入社員説明会が同じホールで行われているはずだ。どうして自分はそこに行けなかったのだろう。考えれば考えるほど何もかもが不安で、

何もかもが億劫で。気力がとうに尽きてしまった私は、小さく呟く。

「就職活動、やり直しかあ……。これから、どうしようか……」

今は何も考えられない。だけど、考えなくてはいけないのだろう。

わかつてはいるが、今はあまりのショックでなかなか頭が働いてくれない。

「家、帰りたくないなあ……」

弱々しい声が口から飛び出す。家に届いたはずの書類を家族、あるいは私の実家を知っている人物に握りつぶされたかもしれないと知った今、怖くて帰りたくはない。だが、私が帰ることができるところはただ一つ。実家のみだ。

うなだれて足元を見ていると、敷き詰められたレンガに黒い斑点がポツポツとつき始めた。

え、と驚いて立ち上がれば、頬に水滴がポツリと一滴落ちる。

空を見上げると、重苦しい空は涙を流し始めた。最初こそ小ぶりだったのだが、すぐに雨脚は強くなる。通りにいた人たちは皆、雨を凌ぐように屋根のある場所へと移動していく。

色とりどりの傘が咲き始めた頃には、レンガ敷きの広場には私以外誰もいなくなってしまった。

私も早く雨宿りをしなければ、ずぶ濡れになってしまうだろう。びしょ濡れになってしまったら、タクシーはおろか、公共交通機関も使えなくなる。頭ではわかっているのだが、身体が鉛のように重くて動けない。

ただ雨に濡れて立ち尽くす私は、周りからどんなふうに見えているのだろう。

普段ならそういうことに気を回せるのだが、今は無理な話だった。

「どこかに消えてなくなってしまう……」

我知らず呟いた言葉に苦笑する。人間どん底に落ちると、何もかもが投げやりになるようだ。実家は、一番近づいてはいけない危険な場所となってしまった今、帰る場所がない。だからこそ、こうして何時間もこの場に残留して未練や不安と闘い今後のことを考えていたのだ。

だが……もう、どうでもよくなってきた。

身体が重く、フラフラする。先程まで鮮明に見えていた雨が、なんだか滲^{にじ}んで見えなくなっていく。もぬけの殻と化した私は、ようやく一步を踏み出す。だが、それ以上は進むことはできなかった。身体が、心が……あの家に帰るのを拒んでいる。

とはいえ逃げ出すことはできないし、『あの人』は逃げることを赦^{ゆる}してはくれないだろう。それなら、いつそのまま……

思考を手放そうとした瞬間、私に冷たく当たっていた雨がフツと止む。

驚いて頭上を見れば、紳士用の黒い傘が差し出されていた。

「おい、君。大丈夫か？」

「え？」

何者かによって差し出された傘に気を取られていたが、酷^{ひど}く慌てた声を聞いて傘の持ち主の顔を見る。

とにかく素敵な男性だ。三十代半^{なか}ばぐらいだろうか。大人の色気を感じた。

背が高く、スリーピーススーツが恐ろしく似合うその男性は、シヨートマツシユの髪を後ろに撫

でつつけるように綺麗に整えている。

透き通るような肌、高い鼻梁^{びりょう}、魅力的な目、薄い唇。こんなに何もかもが完璧で素敵な男性がいるのかと見とれてしまうほどの容姿の持ち主。

そして、なにより魅力的なのは低い声。固い口調ではあるが、そこがまた素敵だった。

大人の男性。今まで接したことがない極上の男性が顔を覗き込んでいる。

身体が言うことを聞いてくれないくせに、そんなところだけはしっかりとチェックしている自分が内心で呆れかえった。

でも、それも仕方がない。綺麗なモノには、誰もが目を奪われる。

それだけ目の前にいる男性が魅力的だということだ。

こんな状況なのに、ほうと感嘆のため息が零れてしまう。

ポーッとしたままその男性を見つめていると、彼は訝^{いぶか}しげに眉をひそめた。

「おい！ 大丈夫かと聞いている」

「は、はい」

ようやく我に返ったが、それでも頭の芯は未だに霞^{かすま}がかかっているようだ。

コクリと一つ頷くと、その男性は心配そうな目で見つめてくる。

「君、かなり長い時間ここにいただろう？」

「え？」

この男性は、私が放心状態でベンチに座っていたことを知っているのだろうか。驚きのあまり目

を見開く。

男性は嘆息したあと、少し離れた場所にいる初老の男性に視線を向けた。

「我が主人が心配をしている」

“主人”と呼ばれた人物は、ロマンスグレーの素敵な紳士だ。ダブルのスーツがとても似合っている。一瞬硬直して驚いた様子を見せたが、私と視線が合うと朗らかにほほ笑んでくれた。

その柔らかい笑みは、人の心を和らげる力があるのか。頑なにっていた心が、少しだけ解れた気がした。

傘を差しかけてくれた男性も素敵な人だが、こちらの男性はまた違った魅力があるおじ様である。おじさん”ではなく、“おじ様”。そう呼んでしまいたくなるほど、ダンディな男性だ。

どこかの社長と言われても違和感は全くないほどのオーラを感じる。

私の父より少し年上だろうか。そのおじ様も、こちらに近づいてきた。

「お嬢さん、どうしましたか？ こんなに、ずぶ濡れになって……」

「あ……」

改めて自分の格好を見て、顔を歪める。おじ様が心配して指摘してくるほど、びしょ濡れになっていた。

入社式だからと張り切って買った新品のスーツだったのに、雨に濡れて色が変わってしまったている。前髪からは、ポタリポタリと滴が落ちてきた。髪もかなり濡れてしまっているようだ。

これだけ雨が強く降っている中、傘を差さずに突っ立っていれば誰でも濡れてしまうだろう。そ

れを指摘されて、恥ずかしくなる。

思わず視線を落とすと、おじ様は優しく声をかけてきた。

「風邪を引いてしまいますよ？ ご自宅までお送りいたしましょう。車は地下駐車場に停めてありますから、移動いたしましょうか？」

優しく促してくれるおじ様だったが、顔の前で両手を振って全力で遠慮する。

「いえ、車のシートが濡れてしまったら大変ですから。お気持ちだけいただきます。ありがとうございます」

身なりがいい紳士二人だ。恐らく高級車と呼ばれるハイグレードの車に乗っていることだろう。

そんな高級車に、ずぶ濡れのまま乗る勇氣はない。

シートが濡れてしまったら弁償などできない、と彼らに訴える。

フルフルと首を横に振ると、身体がふらついた。

しかし、それを悟られないようグツと足を踏ん張って堪える。これ以上、心配は掛けられない。そうやってごまかしていると、おじ様はより心配そうな目をして見つめてきた。

「でも、その格好では電車にもタクシーにも乗れないでしょう」

「……大丈夫、だと思えます」

おじ様の言う通りだが、嘘をついて曖昧にはほほ笑んでみせる。

実際は、歩いて帰る、しか選択肢が残されていないが、それも仕方がない。

言葉を濁してやり過ぎそうとすると、おじ様は首を横に振る。

「大丈夫ですよ、お嬢さん。車は革張りですから、あとで拭き取れば元通り。そうでしょう？」
おじ様は、傘を差してくれている男性に言うのと、彼も頷く。

「車に乗っていきなさい。その方がいい。とにかく、早く身体を温めた方がいいだろう」
「で、でも……！」

見ず知らずの人に、そこまでしてもらうのは気が引ける。

未だに顔かない私を見て、おじ様は無言を言わせない様子でニッコリとほほ笑んだ。

「ご自宅までお送りします。さあ、行きましょう」

強引にでも連れて行くつもりでいるおじ様を見て、ありがたくも恐縮した。

だが、今は自宅に帰れない。帰ることができない事情がある。

無言のまま首を横に振ると、それを見て紳士な二人は顔を見合わせた。

頑な過ぎる態度を取り続ける私を、なんとかして懐柔しようとしてくれる二人。その優しさが、嬉しい。心も身体もボロボロになって弱っている今、無償の愛は無条件で私の心を包んで守ってくれた。ふと力が抜け、ハラハラと涙が落ちていく。

今朝から散々なことばかりが続いている。だからこそ、こうして優しさに触れて涙腺が緩んでしまっただけだ。

見ず知らずのやつれきっている女性が泣き出したら、絶対に彼らは困るはず。

わかっているのだが、涙は止まってくれなかった。

何度も目を擦るが、心が悲鳴を上げていているせいだろう。止まる様子はない。

感情が高ぶっているのに、頭は霧がかかったように真っ白になっている。

自分がどんなふうに立っているのか。それさえもわからず、身体感覚がなくなっていく。

心配そうに顔を覗き込んでくる二人の男性からの優しさを感じて、思わず苦しい思いを小声で吐露していた。

「……帰れない」

「え？」

傘を差してくれているクールそうな男性が腰を屈める。私の声が聞こえなかったのだろう。

耳を傾けてくれる彼の優しさに触れて、身体から完全に力が抜けていく。

「帰りたく……、な……い」

「どういう意味だ」

困惑の色を隠せない様子の男性。そんなときでも綺麗な顔をしていた。

(瞳……キレイ)

吸い込まれそうなほどキレイな彼の瞳に釘付けになる。

どうでもいいことを頭の中で思いながらも、熱に浮かされたように呟いた。

「私、もう……あの家には、帰ることができないの」

「あ、おい！ 大丈夫か？」

彼の焦った声が聞こえる。返事をしたいのに、今の私には指一本、唇さえも動かす気力がない。

高いところから闇の中に落ちていく。そんな意識の中、身体が寒々と冷え切っていくのがわかった。

目を開けようとしたのだが、その瞼まぶたさえも重く感じた。首を動かすことも億劫に感じたが、ゆっくりと動かして辺りを見回す。

(ここ……は?)

ホテルの一室だろうか。映画のワンシーンにありそうな素敵な部屋を見て、自分は夢の中にいるのではないかと思うほどだ。

先程までいたのは、シャルルドリンク本社ビルの前だったはず。それがどうしてこんなところにて、寝心地がいいベッドに寝かされているのか。

身体がだるくて考えがまとまらないが、そこでようやくあの場で倒れたのだと思い出した。

恐らくだが、倒れる直前に声をかけてくれたロマンズグレイのおじ様と、クールで堅い印象だが超絶美麗な顔をした男性が助けてくれたのだろう。体調が悪化した私を心配して、個室のある病院に担ぎ込んでくれたのかもしれない。

誰かいないかと身体を起こそうとすると、女性が慌てた様子で部屋の中に入ってきた。

「ダメよ、まだ寝てなくちゃ」

艶のあるストレートの黒髪が、肩の上でサラサラと揺れている。

とても綺麗な人だ。大人の円熟さに、同性でもドキドキしてしまう。

頬を赤らめる私を見て、彼女は眉をひそめた。

「あら、顔が赤いわね。また、熱が上がってしまったのかしら？ ほら、これで熱を測ってくれる？」

女性は体温計をサイドテーブルから取り、手渡してくる。それを受け取り、ゆっくりとした動作で腋わきに挟んだ。数秒でピピッと電子音がしたので取り出す。

三十八度。なかなか熱が高い。この熱のせいで身体が重いのか、と腑に落ちる。

体温計を女性に手渡すと、熱の高さを見て顔をしかめた。

「まだ、熱は下がらないわね。お医者さまも、精神的ショックと過労、ついでに冷たい雨に打たれて身体が冷えたための風邪、この三つが倒れた原因だっておっしゃっていたわ。今日は絶対にこの部屋から出ちゃダメよ」

テキパキと話す口調は、いかにもキャリアアウーマンといった感じだ。

私より十歳は年上だろうか。今日は素敵な人にばかり会っている気がする。

ほう、と感嘆のため息をついていると、女性は慈愛溢れる笑みを浮かべて矢継ぎ早に声をかけてきた。

「体調はどう？ まだ熱が高いから辛いでしょう？ 他に辛いところはない？ 気持ちが悪いか、

お腹が痛いとか」

「あ、えっと、身体がだるいだけです。たぶん、熱が高いせいだと思います」

「お腹はすいていない？ もうお昼はとづくにすぎたわよ？」

「え……今、何時ですか？」

「今は午後二時。貴女が倒れたのは、十一時ぐらいだったらしいわ。それからずっと意識がなかったの。お医者さまはそのうち意識が戻るとおっしゃっていたけど、なかなか目を覚まさないからすごく心配したのよ」

ホッとした様子で胸を撫で下ろす彼女に、慌ててお礼を言う。

「助けていただき、本当にありがとうございしました。ご迷惑おかけして申し訳ありません」

これ以上、迷惑は掛けられない。早々にお暇いじました方がいいだろう。身体はだるいが、倒れた当初に比べれば動けるようにはなってきた。再び身体を起こそうとしたのだが、それを女性に止められしてしまう。

「ダメよ、寝ていなくちゃ。無理して風邪を拗こじらせたらどうするつもり？」

確かにその通りで口を嚙くむと、彼女は私を労いたわするようにふんわりとほほ笑んだ。

「それに、助けた彼らに何も言わずに出て行くつもりなの？」

「あ」

その通りだ。これだけ迷惑をかけてしまったのだから、まずはお礼だけでも二人に言いたい。

私の動きが止まったのを見てホッとした様子の彼女は、近くにあった椅子に腰かける。

「貴女をこの家に担かぎ込んだと聞いたときは、ビックリしたなんてものじゃなかったわ。だって、こんなに若くてかわいらしい女性だとは思っていなかったから」

ふふ、と軽やかに笑うと、その女性は自己紹介をしてくれた。

「私は、矢上やがみ美和。シャルールドリンクで社長の第二秘書をしているの」

「シャルールドリンク、ですか」

「ええ、そうよ。貴女を助けたのは、シャルールドリンクの社長と第一秘書なの」

「そう、なんですか……」

傘を差し掛けてくれた男性がおじ様のことを「我が主人」と言っていたので、社長はおじ様で、秘書は超絶美麗な彼なのだろう。

とても驚いたが、すぐに腑に落ちる。彼らは、私がずっとあのベンチに座っていたことを知っている様子だった。もしかしたら、社長室から私の姿が見えていたのかもしれない。不審者がいる、と警戒して、あのととき声をかけてきたのだろう。

横になっていてとは言われたが、初めましての挨拶はきちんとしたい。重い身体を起こして自己紹介を返す。

「三枝美雪と言います。このたびは、助けていただきありがとうございました」

深々と頭を下げると、彼女は両手を顔の前で振って慌て出した。

「いいのよ、いいのよ。私は特に何もしていないの！ ちょっと待っていて、社長を呼んでくるから。午前中は入社式とかあってバタバタしていたんだけど、午後からは在宅に切り替えてWeb会議をしているの。今は休憩中だから、ちょうどいいわね」

先程まではかっこいい大人の女性といった雰囲気だったが、ぱたぱたとした仕草はかわいらしい。慌てた様子で部屋を出て行くこうとする彼女の後ろ姿をほほ笑ましく見ていたが、現実を思い出して気持ちがズンと沈んでしまう。

(もし、何者かに入社辞届を出されていなかったら……)

矢上さんのような素敵な女性がいる職場で働いていたのかもしれない。そう考えると、悲しくなった。入社できなかったことを思い出し、再び涙が零れてしまう。

涙を手で拭いていると、矢上さんが私を助けてくれた男性二人を連れてきた。しかし、私の頬に伝う涙を見て一同が大慌てし始める。

「どうしたの？ 美雪ちゃん。苦しいの？ どこか苦しいのね？ それとも、痛いのかしら？ ええ？ どうしましょう！」

「お嬢さん、横になりなさい。とにかく今は安静にしていることが大切ですよ」

おじ様と矢上さんがオロオロと慌て出したのを見て、「大丈夫です」と告げようとした。だが、その言葉は驚きで呑み込むこととなる。傘を差し掛けてくれた男性——シャルルドリンク社長の第一秘書にいきなり布団を剥がされたからだ。え、と声を出して驚いていると、彼は私を抱き上げた。

「え？ え？」

熱で頭が朦朧としている上に、想像を遙かに超えた事態になっている。

目を瞬かせて慌てふためいているというのに、彼は相変わらず眉間の皺を消すことはない。

綺麗な横顔を至近距離で見つめてしまい、顔が熱くなる。

これは多分、風邪からの熱ではない。こんなふうに男性に抱きしめられたこともなければ、抱き上げられたこともないからだ。恥ずかしくて逃げ出したくなる。

あり得ない状況を目の当たりにし、ドキドキすぎて何も言えなくなってしまう。

「病院に連れて行く」

低く鋭い声でそれだけ言うと、私を横抱きにしたまま部屋の外へ出てしまう。

身長の高い彼に抱き上げられ、あまりの高さに怯えてしまった。キュツと彼のスーツのジャケットを握りしめると、彼は眉間に皺を寄せたまま不安そうに顔を覗き込んでくる。

「大丈夫か。辛いんだろう？ 早く、医者に診せよう。ここでは、しっかりとした検査ができないから」

「え？ いえ、待つてください」

「待てない。そして、待つつもりはない」

部屋を飛び出して廊下に出ても、彼は私を下ろそうとはしなかった。ただ、前を見て足早に歩いていく。その足取りに迷いはない。

背後から「落ち着いてください」という矢上さんの声がしたのだが、その声に耳を傾けようともしない。

彼女の話では、先程医師には診てもらって風邪や過労だと診断が出たと言っていたはず。これ以上の検査は、必要ないだろう。それなのに、どこかムキになっている彼に訴える。

「待つてください。大丈夫ですから。ただの風邪だってお医者様が言っていたって矢上さんが」

私の言葉を遮るように、彼は呟いた。

「……大丈夫なものか」

「え？」

苦しうに声を絞り出して言う彼を、目を見開き驚いて見つめる。

未だ眉間に皺を寄せたままだが、彼はようやく足を止めた。そして、真剣な眼差しで見つめ返してくる。視線が鋭い。その迫力に押し黙る。

「じゃあ、どうして泣いていたんだ？ 苦しくなったからなんだろう？ 泣くぐらい辛いなら医者に診てもらった方がいい」

「えっと、でも……」

「大きな病が隠れているかもしれない。大丈夫だ、たいしたことない、安心して。その言葉が一番信用ならないんだ！」

声を荒げる彼に啞然としてしていると、駆け寄ってきた矢上さんとおじ様によって引き留められた。

「彼女はただの風邪と心労だって、さっきお医者様が診断してくれたでしょう？ 落ち着いてください」

「そうですね。少し落ち着きましょう」

「だが……」

彼らに引き留められて、ようやく我に返ったらしい。

だが、依然として眉間に深く皺が刻まれたままだ。彼の視線が私に向く。

「本当に大丈夫か？」

「っ！」

ドキッとするほど色気を感じるその目で問いかけられ、ますます熱が出てしまいそうだ。顔を赤

く火照らせて、何度も頷いた。

「本当に大丈夫です。皆さんによくしていただいたおかげで、目を覚ますことができましたから」

「……本当、か？」

「はい」

再び大きく頷いたのだが、未だに彼の憂いは消えないようだ。

なんと言えば彼は安心してくれるのだろうか。一生懸命考えるのだが、彼のことを全く知らない私では対処法など思いつく訳もない。

くしゅん、と小さくくしゃみをすると、矢上さんが目をつり上げて彼を注意し始める。

「ほら、彼女は風邪引きさんなの。これ以上、身体を冷やして熱を上げたいんですか！」

熱がまた上がりきっていないのだろう。確かに悪寒がしてブルブルと震えてしまう。

彼の腕の中は温かいとはいえ、高熱が出ている私には少々寒く感じた。節々も痛いし、とにかく身体がだるい。

だが、依然として私を抱き上げている彼は、医者に診せるべきか否かと葛藤中のようで、その場に立ち尽くしたままだ。ますます心配そうな表情になった彼の肩に、おじ様は手を置く。

「ほら、一度戻りましょう。雨に濡れて風邪を引いてしまったんです。まずは、彼女を暖かい布団に戻すことが先決ですよ」

「……」

「熱が下がって、それでも心配なら、彼女を病院に連れて行って精密検査でもなんでもしてもらえ

ばいいんです。よろしいですね？」

おじ様の言葉に異論はなかったのだろう。彼は方向転換し、先程の部屋へと足を向けた。私をベッドに寝かせ、すぐさま布団をかけてくれる。

「寒くないか？」

「はい、お布団が暖かいので」

今頃になって彼に持ち上げられた上、密着した状態だったことを思い出して恥ずかしくなってしまう。目を泳がせて曖昧にほほ笑んだのだが、彼は必死な様子で見つめてくる。

異変はないか、苦しんではいないか。どんな小さなことでも見逃さないといった感じだ。

男性に見つめられるだけでもドキドキしてしまうのに、相手は超絶美麗である。全くもって居たまれない。

心配症な彼を見て、矢上さんは肩を竦めた。

「とにかく、彼女は病人よ。それに、うら若き乙女の部屋に男性が長居するものではありません！」

「む……」

秘書の彼は唸ったが、確かにそうだとおじ様は大きく頷いている。

矢上さんは、そんな男性陣の背中を押して部屋の外へと追い出してしまった。そのあと廊下で彼女の叫び声が聞こえ、男性陣が何かを言っている。どうしたのか、と不思議に思っていると、未だに何か言っている男性陣を振り切り切つて彼女は扉を閉めてしまう。

「どうか、されましたか？」

何か揉めている様子を感じて心配になる。私のせいで揉め事が起きているのなら、申し訳ない。

「違うの、違うの！ ちょっと仕事のことだね」

矢上さんはごまかすように盛大なため息をついたあと、ニツコリとほほ笑みかけてきた。

「寒気があるってことは、まだこれから熱が高くなるわね……。とにかく寝ていてね。あとで、軽く食べられる食事を用意して持つてくるから」

倒れた私を介抱してくれただけでもありがたいのに、これ以上は甘えられない。

帰りますから、と首を横に振ったのだが、彼女は顔を近づけてニンマリと笑う。

「あら？ 今、この状況でここを抜け出すつもり？」

「え？」

どういう意味だろうと首を傾げると、彼女は意味深にほほ笑んだ。

「さっきの……えっと、貴女を抱き上げた男性ね。あの人の様子を見ただししょう？ 本当に今、出て行ってもいいと思っているの？」

「えっと……？」

「貴女が涙を流してただけで、あの取り乱しようよ？ 熱がある貴女がここを飛び出したなんて

わかったら……何をするか、わからないわね」

それでもいいの？ と試すように目を細めてきた。その表情はとても美しいのに、押し強さを感じる。フルフルと首を横に振ると、矢上さんは「よろしい」と満足げに頷いた。

しかし、未だにどこか納得しきれない私の様子を見て、彼女は顔を曇らせる。

「絶対に、何も言わずに出て行くことだけは止めてね。お願いよ」
「え？」

秘書の男性といい、矢上さんといい、どこか必死な様子になった。さすがに何も言わずに出て行くなんてことはしません、と言うと、彼女は困ったように眉を曇らせる。

僅かな躊躇のあと「私が言うべきじゃないかもしれないけど、言わないと貴女は遠慮しすぎそうだから」と前置いて矢上さんは口を開く。

「先程の彼ね。妹さんがいたんだけど、数年前に病気で亡くなってしまったの。そうね、彼女が亡くなったのはちょうど貴女ぐらいの年齢だったわ」

「え……？」

言葉もなくした私を見て、矢上さんは目を伏せる。

「風邪を拗らせて、そのまま……。元々身体は弱かったらしいんだけどね」

小さく嘆息したあと、彼女は重々しく口を開く。

「最初は軽い風邪だと思っていたの。彼女自身も大丈夫だ、心配いらないうって言っていたらしいわ。それを真に受けていたけど、急変してしまっただけね」

「……」

「彼は貴女と妹さんを重ねて見てしまったんだと思うの。ねえ、美雪ちゃん。元気になるまで、ここにいてちょうだい」

「矢上さん、でも……」

「彼に恩を感じているのなら、ね？」

「……は？」

ようやく素直に頷いたからだろう。矢上さんは、ホッとした表情を浮かべた。

「これにて交渉成立！ 色々と詳しいことは体調が万全になってからね」

「はい……お世話になります」

「うん、安心して身体を休めて。ああ、そうそう。今、貴女がいるこの家は社長の自宅なの。お手伝いさんもいるから安心してね」

廊下に出たときに病院でもホテルでもないことには気がついたが、まさかシャルルドリンク社長
長の自宅だったとは。

「じゃあ……こちらは、おじ様のご自宅なんですね。ご家族の方は私がここにいることを承諾してくださっているのでしょうか？」

家主だけではなく、きちんとおじ様の家族にも了承してもらわなくては居づらい。

矢上さんを見ると一瞬動きを止めたが、すぐに私に向き直った。

「えっと、社長……美雪ちゃんが言っているおじ様の奥様は鬼籍きせきに入られたの」

「そう、なんです」

「ええ。娘さんは嫁がれていて、この家には社長と秘書の彼だけなの」

「社長であるおじ様と、秘書さんが一緒に住んでいるんですか？」

「そ、そうなのよお」

矢上さんは、うんうんと何度も頷く。そんな彼女を見て、首を傾げる。どうしたのか、と聞いたが、笑ってごまかされてしまう。大企業の社長秘書ともなると、プライベートでもついて回らないといけないのか。

秘書さんって大変なお仕事ですね、と正直に伝えると矢上さんはなぜか苦笑した。

「ま、まあね。とにかく、ここには家政婦の女性もいるから安心してね」

確かに男性二人が住む家に女性一人。さすがにそんな環境では居づらいので、それを聞いてホッと胸を撫で下ろしていると、なぜか彼女も安心した表情を浮かべていた。

どうしましたか、と問いかけると、「なんでもないのよ」と話をそらすように彼女はバッグを取り出した。私のバッグだ。

「これ、貴女が持っていたバッグ。何も落としてはいないと思うけど、あとで確認しておいてくれる？」

「……はい」

バッグを受け取りながら頷くと、矢上さんは「飲み物を取りに行ってくるわ」と部屋を出て行った。ほう、と小さく息を吐き出したあと、社長秘書である男性の必死な形相を思い出す。

矢上さんの話を聞いて、冷静沈着そうな彼が取り乱した理由がわかった。彼の妹と私の姿が重なって見たのだろう。

彼の気持ちを考えると、胸の辺りが苦しくなる。これは大人しくしていなくてはダメだろう。こ

れ以上、彼の心労を増やしてはいけない。

布団を口元まで引き上げつつ、未だに熱でぼやけがちな目で天井を見つめる。

今日は、最悪な日だった。

誰かの手により入社することができず、挙げ句の果てには雨に打たれて倒れてしまい、人様の手を煩わせてしまう始末。そして――

背筋がゾクツとする。これは風邪の悪寒おかんじゃない。『あの人』の目が今も尚、私を怯えさせているからだ。

おじ様たちに迷惑をかけてしまい心苦しくも感じるが、私にとってはラッキーだったのかもしれない。実家に帰らなくてもよくなったのだから。

矢上さんが置いていってくれたバッグを開き、携帯を取り出す。

父だけには、今のこの状況をメールしようとした。しかし、そこでふと指が止まる。入社式に出ていると思っている父を悲しませたくはない。いずれは入社できなかったことを話さなければならぬだろう。だが、もう少し時間がほしい。まずは、自分の心と頭の整理が終わってからだ。

それに、入社式に出られなかったことを『あの人』には絶対に知られたくない。父に今の状況を話してしまつたら、間違ひなく『あの人』にも伝わってしまう。それを考えると、父には本当のことを伝えない方がいい。

(今、私の居場所を知られてはまずいよね……)

場所を知られたら最後、もしかしたらこのお屋敷に乗り込んでくる可能性もあるからだ。

そんなことになれば、厚意で私を助けてくれたおじ様たちに迷惑がかかる。

キユツと唇を噛みしめ決意を固めたあと、メールアプリを起動させてタップする。

父には『同期の女の子が会社の近くに住んでいて、そのマンションでルームシェアしないかと相談があったの。今後のことを考えて、そのお宅にお邪魔させてもらうことにしました。少しの間、彼女のマンションで暮らしてみね。また連絡します』と送ることにした。

「ごめんなさい、お父さん」

嘘をつくことに關しては、後ろめたさが半端ない。だが、今は何があんでも『あの人』から逃げなくてはならないのだ。手段は選べない。

震える手でメールを送信して電源を切ったあと、罪悪感と共に少しの安堵感が眠気を誘う。

『あの人』に囚とらわれることがない、この優しく安全な場所のぬくもりを感じながら……

2

意識がはつきりしたときには、三日が経過していた。まさか、父にメールを送ったあと、そんなにも長く朦朧もろろとしながら眠り続けることになるとは思ひもしなかった。

先程携帯を立ち上げて確認したら、父からはメールを送った日に『わかりました。お友達に迷惑をかけないように。あと、荷物を送ってほしかったら連絡ください』という返信が届いていた。父

は、私を信用してくれている。だからこそ、この返事なのだろう。

母は私が幼い頃に亡くなっている。それこそ、母の記憶がないぐらい昔だ。それから、父ひとり子ひとり生活してきた。男手ひとつで育ててくれた父には、感謝しかない。だからこそ、父が再婚したいと言い出したときには背中を押したのだ。しかし――

こちらのお宅で用意してくれたワンピースに着替えながら思い悩んでいると、部屋に家政婦ととの寿子さんがやってきた。

御年七十の女性だ。とてもおしとやかで、おっとりとした雰囲気がある人である。

「あら、とってもお似合いですよ。美雪さん」

「ありがとうございます」

膝下丈のワンピースはアイボリーで春らしい色合いだ。ウエスト部分にはリボンがあり、切り替えプリーツでとてもかわいい。しかし、このワンピースで寿子さんと一悶着ひともんぢやくがあったのだ。

朝食を済ませたあと、寿子さんは私にこのワンピースを手渡してきた。

『このワンピースに着替えてくださいね』

『素敵なワンピースですね。でも、私にはスーツがあるので。それで大丈夫です』

遠慮する私に、彼女は首を横に振った。

『この家で、こんな若いお嬢さんの服を他に誰が着ると言うのですか？ 美雪さんが着なければ、捨てるだけになってしまうんですよ？』

これ以上甘えることはできないと言ったのだが、最終的に涙目で訴えられてしまった。

『着てくれませんか？ 貴女に似合うと思つて用意されたそうですよ？』

その目に負けた私は、ありがたく頂戴することにした。しかし、そのあとケロリとした表情を浮かべていた寿子さんを見てみると、嵌められたのではないかと睨んではいるのだけだ。

私の格好を見て、彼女は嬉しそうに何度も頷いたあと、のんびりとした口調で言った。

「美雪さん、どうぞこちらへ。旦那様方がお待ちですよ」

こちらのお宅に担ぎ込まれてから三日。昨夜あたりから熱が下がって元気になった私は、ようやく恩人たちと会えることになったのだ。

身だしなみを確認したあと、寿子さんの後について部屋を出る。

彼女は社長宅で働いて長いらしく、内情に詳しいのだと矢上さんが言っていたことを思い出す。

寿子さんにも、熱でうなされておるときに大変お世話になった。

何度もお礼は言ったが、後日きちんとしたお礼がしたい。そんなことを考えながら足を進める。

体調が戻るまでは最初に運ばれた部屋ですつと寝ていたので気がつかなかったのだが、ここは相当大きなお家だ。お屋敷と呼ぶにふさわしい。

不躰だとわかつていても、どうしても周りを見回してしまう。

寿子さんの足が襖の前で止まった。ふと、外を見ると立派な和風庭園があった。かなりの敷地があるようだ。グルリと見渡しても塀が見えない。

私が借りていたゲストルームの辺りの様子から洋館だと思っていたのだが、いつの間にか和風な雰囲気が変わっている。

この家は一体どれほど広いのか。自分が生きている世界とまるで違うものを目の当たりにし、驚愕してしまう。

寿子さんが「お連れいたしました」と中に向かって声をかけた。

「ああ、寿子さん。入ってもらってください」

中からおじ様——シャルルドリンク社長の声が聞こえる。それを聞いた寿子さんは、襖を開けた。畳敷きのその部屋には一枚板の大きな座卓があり、床の間には立派な掛け軸とセンスのいい生け花が飾られている。この部屋をパッと見ただけでも、格式高いことだけは伝わってきた。

中にはおじ様と秘書の男性が座っていて、入ってきた私を見つめてくる。

「ほら、お嬢さん。こちらに、いらしてください」

「は、はい！」

この三日間、初日を除いて彼らが私の元に来ることはなかった。恐らく、矢上さんの発言を聞いて、遠慮してくれていたためだろう。勧められるがまま座布団に座ると、寿子さんが襖を閉めて出て行った。それを合図に、おじ様は声をかけてくる。

「お嬢さん、体調はいかがですか？」

相変わらず柔らかい物腰だ。ほんわかとした雰囲気のおじ様に、大きく頷いた。

「はい、体調は元に戻りました」

「そうですか。それならよかったです」

安堵した様子の彼を見て、恐縮してしまう。おじ様とその隣にいる秘書の男性に頭を下げた。

「今更ですが、三枝美雪と申します。このたびは、ありがとうございました。そして、ご迷惑をかけてしまい申し訳ありませんでした」

心からのお礼と謝罪を言ったあと、顔を上げて二人に言う。
「また後日、改めてお礼に伺います」

この数日間の感謝を伝えたのだが、男性陣二人は顔を見合わせている。どちらも苦い顔をしていることに気がつき、首を傾げた。どうしたのだろうか、と不思議に思っていると、秘書の男性は小さく嘆息する。

「……ここを出て行くつもりか」

「え？」

そんなふうと言われるとは思っておらず、目を瞬かせた。訳がわからずにいると、今度はぞんざいな口調で繰り返される。

「ここを出て行くつもりなのか、と聞いている」

「えっと……そのつもりですが」

私がお宅にずっといい訳がないし、なによりいる理由もない。彼の意図がわからず、焦ってしまふ。

初めて会った三日前にも思ったことだが、彼は常に眉間に皺を寄せて難しい顔をしている。もちろん今も、その表情を崩していない。クールで口調がきつめなので、怖さも倍増だ。

思わずすくんでしまった私を見て、おじ様はフツツと笑って宥めてくる。

「大丈夫、彼は美雪さんを心配しているだけです。怒ってなどいませんよ？」

「は、はあ……」

そんなフォローが入っても怖いものは怖い。真つ正面に座る彼からの厳しい視線に負けそうになっていると、おじ様は目尻にたつぷり皺を寄せて声をかけてきた。

「矢上さんから聞いていると思います……。私はシャルルドリンクの社長をしています」

「えっと……。野崎さん、ですか？」

シャルルドリンク社長の名前は、野崎だったはず。面接で聞かれるであろうことは、今も尚、頭の中に入っていた。それを指摘すると、おじ様は首を横に振る。

「実はこの春、社長は交代することが決定しています」

「え？」

「社長は野崎さんでしたが、病気療養のために今春社長職を退くことが決定しました。それで、私がおの後釜に座ることになったんですよ。元々は違うグループ会社で働いていましたが、今回縁あってシャルルドリンクに」

「そうだったんですね」

篋ホールディングスにはたくさんのグループ会社がある。その中の一つがシャルルドリンクだ。そして、おじ様は今春までは他のグループ会社のトップ、もしくは重役だったのだろう。それなら、このお屋敷の大きさなども納得できる。

「ええ。現在、着々と準備を進めているところでして。社長代理として数週間前から動いております」

してね。入社式でも新入社員たちが私を見て驚いていましたね」

「そう……だったんですね」

今の私には、もう関係のない情報だ。そう思えば思うほど、寂しさが込みあげてくる。

意気消沈していると、おじ様は茶目つ気たつぷりの表情で懇願してきた。

「でも、美雪さんには、社長ではなくておじ様って呼んでほしいですね」

「え？」

彼のことを、ずっと「おじ様」と呼んでいた。だが、どうしてそれを知っているのだろうか。

ポツと頬を赤らめると、彼はクスクスと笑いながら言う。

「矢上さんから聞きましたよ。美雪さんが、私のことを「おじ様」と呼んでいると。それを聞いたときに、美雪さんにはぜひ「おじ様」と呼んでもらいたいと思っただけです」

意外なりクレストに目を丸くさせると、彼は穏やかに目を緩ませる。

「私の名前を知らなかったからだとは思いますが、おじ様なんて若い女の子に呼んでもらったらドキドキしちゃいますしね」

「ふふっ」

おじ様は、私を緊張や不安から解き放とうとしてくれたのだろう。その優しさに涙ぐんでしまっそうだ。和やかな雰囲気になって顔を綻はせた私に、おじ様は秘書の男性を紹介してくれた。

「彼は私の第一秘書をしています。恭祐さんです。前会社からの付き合いでしてね。彼が入社したときからの仲なのです。彼のことは「恭祐さん」と呼んであげてください。皆、そう呼んでいます」

のび

「恭祐……さん、ですわね」

「ええ。そうですよ。彼も私も名字は「たかむら」です。漢字は違うんですけどね」

おかしように噴き出しながら言うおじ様を見て、きよとんとする。どこか意味深に感じたからだ。不思議そうにしている私を見えますます楽しそうなおじ様だったが、秘書の彼——恭祐さんをチラリと見て肩を竦める。盛大にため息をついたあと、おじ様は困惑した様子で言う。

「困ったことに、彼は一人だと自堕落的な生活をしてしまうんですね」

「自堕落的……」

「ええ、本当に無頓着なんですよ。何事においても」

「は、はあ……」

「放っておくと、食べるのも忘れるぐらい仕事の虫でしてね。それが心配で、彼が秘書になってからは私がお目付役になっているんです。お節介焼きなんですよ、私は」

クスクスと楽しげに笑うおじ様だが、その隣から異様な雰囲気を感じた。

恐る恐る、恭祐さんに視線を向ける。どこかストイックな雰囲気がある彼なら、プライベートも折り目正しい生活をしているように感じるのだが……

彼には似合わない「無頓着」という言葉を聞き、その意外性に目を見張った。話題が自分に飛んできて、恭祐さんは不機嫌な様子だ。意外な一面を見て驚く。

視線が合うと、ぱつが悪そうにそらされてしまった。そんな私たちの様子を見て笑ったあと、お

じ様は眉尻を下げて顔を曇らせる。

「早いところ、彼を見てくれるかわいなお嫁さんが来てくれるといいのですけどねえ」

おじ様がため息交じりで愚痴をこぼすと、恭祐さんの眉間にある皺がより深く刻まれた。

威圧的なオーラを彼から感じる。そんな彼に怯えている私に反して、おじ様は慣れているのだろう。余裕綽々で、その冷たい視線を受け止めている。

「そんな理由もあり、彼と一緒にこの家に住んでいるのですよ。私としても、近くに彼がいてくれれば公私ともに私を支えてもらえますし。Win-Winの関係ですよ。とても助かっているんです」
「そうなんですね」

おじ様を見てみると、ほのぼのとした気持ちになる。大企業の社長とは思えないほどだ。高みに上ったからこそ、心に余裕があるのだろうか。すっかり心を許していたが、ふと彼の隣にいる恭祐さんに視線を向けて再び震え上がった。依然として厳しい表情のまま、冷たい視線を私に向けていたからだ。

一気に顔を悪くした私を見て、おじ様は困ったように隣にいる彼を諷める。

「ほら、恭祐さんが怖い顔をして美雪さんを見ているから、彼女が怯えてしまっていますよ？ 可哀想に……」

「むう……」

指摘されて少しだけ表情を和らげた恭祐さんだが、まだ怖いものは怖い。彼に対して不興を買ってしまったのだろうか。あれこれ考えて、肩を落とす。色々とやかかしていたことを思い出したからだ。

会社の前に何時間も居座り、挙げ句の果てに熱を出して倒れるという大迷惑をかけた。

社長であるおじ様が「ここで看病する」と言ってくれたから、渋々滞在させてくれたのだろう。考えれば考えるほど、落ち込んでしまう。

本を正せば、彼は意識を戻した私が涙を流しているのを心配して、病院に連れて行こうと言ってくれた。そんな心の優しい恭祐さんにこうまで厳しい視線を向けられることは、理由がわかっているにも苦しくなる。

とにかく、私はこのお屋敷においては、厄介者で間違いはない。こうして元気になったのだから、早くお暇した方がいいだろう。もう一度だけお礼を言おうと口を開いたが、恭祐さんの方が早かった。

「君が倒れたとき、帰れないと言っていた」

「え……？」

そんなことを言っていたのか。薄く口を開いて、啞然とした。

あのときは朦朧としていたため、彼らとのやり取りをあまり覚えていない。

帰れない。それは、本当のことだ。だからといって、ここにずっと滞在している訳にはいかない。入社できず働き口がなくなってしまう以上、私に残された道はただ一つだ。父たちがいる実家に帰るだけである。

硬い表情になって口を閉ざすと、恭祐さんはますます追求してきた。

「帰りたくない、とも言っていた」

「……」

そんなことも言っていたのか。初対面の相手にそんなへビーな内容を口にしていたことに自分も驚いてしまう。それほど、あのときの私は切羽詰まっていたということだ。

だが、今は違う。熱にうなされていけないし、少しだが気持ちも整理がついてきた。まだまだ考え込んでしまうが、終わってしまったものは取り返せないし、考えたところで事態が好転するとはとても思えない。それに、彼らにはここまで多大な迷惑をかけてきてしまった。これ以上、こちらの事情で振り回すことなどできないだろう。

唇を固く結んだまま、厳しい視線を私に向け続けている恭祐さんと対峙する。

そんな私たちを横から見ているおじ様が、「まあまあ」と話に入ってきた。

「美雪さん、何か事情があるのでしょうか？」

「おじ様」

彼が話に入ってくれたおかげで助かった。ホッとして表情を緩めると、おじ様は優しくほほ笑んでくれる。しかし、なぜか恭祐さんはますます怖い顔になった。あまりに恐ろしくて視線をそらしておじ様に向き直る。

恭祐さんの視線が鋭く、顔にジリジリとした熱を感じて居心地が悪い。大いに慌てている私を見たとおじ様は、目尻を下げたあと優しく語りかけてきた。

「こうやって知り合ったのも、何かの縁。私に話してみませんか？」

「え？」

人の怖さに直面したあとに、こうして優しい声をかけてもらえると嬉しくなる。

目尻に溜まった涙を人差し指で拭いていると、おじ様は依然として面白くなさそうな表情でいる。恭祐さんに苦言を呈した。

「若いお嬢さんに、そんな怖い顔をしていたら怯えてしまいますよ」

「そ、そんなつもりは……！」

彼が視線を泳がした。心なしな顔が赤い。先程までの彼とは打って変わり、隙だらけな気がした。硬い表情の恭祐さんしか見たことがなかったので、かなり意外だ。目を瞬かせ彼を見つめると、ばつが悪そうに頭に手を置いてガシガシと髪を乱している。

黙りこくったままの彼を見て、優しい笑みを浮かべているおじ様。彼らは主従関係なのだが、それ以上の絆が見えた気がした。

彼らといると、縋ってしまったくなる。私だけでは手に負えそうにもない悩みを抱えているからだ。本当は甘えてしまいたい。話だけでも聞いてほしかった。しかし、人様に頼っていいようなものではないだろう。小さく首を横に振る。

「お気持ちは嬉しいです。でも、とてもお話しできるようなものではなくて……」

私が渋っているのを見て、おじ様は難しい顔つきになる。そして、なぜか恭祐さんに視線を向け何かを目で訴えているようにも見えた。

どうしておじ様が伺いを立てるように彼を見ているのか。そのことに疑問を抱いたとき、恭祐さんがテーブルの上で手を組んだ。そして、こちらを射貫くように強い眼差しを向けてくる。少しの違和感は、彼の顔を見て消え失せた。ドクンと胸が大きく高鳴る。

先程までは、彼の雰囲気には怯えてしまっていて見る事ができなかったから気がつかなかった。私をとても心配しているように彼の瞳が揺らいでいること、そして真摯な視線は厳しさだけでなく優しさに溢れていることに。

唇を動かそうとしたが、何を言いたいのか自分でもわからず、そのまま喋らんだ。

恭祐さんは小さく息を吐き出したあと、冷静沈着という言葉がよく似合う声色で言った。

「家に帰ることができない、家出少女を見過ごすことはできない」

「家出少女って……。もう、成人しています！」

真面目くさった顔で言うものだから、思わず噴き出してしまった。クスクスと声を出して笑い出した私に、恭祐さんは呆気にと取られている様子だ。しかし、すぐに慥然とした顔に戻る。どうして笑われているのか、わからないからだろう。彼が不機嫌になるだろうと予想していたが、やっぱりなかった。予想が当たり、彼には悪いが楽しくなってしまう。久しぶりに心から笑った気がした。三日前の入社日の日から笑えなかったから、なんだか凝り固まった心が少しだけ解れた気がする。

恭祐さんがおじ様に視線を向けると、彼は小さく頷いた。そして、こちらに身を乗り出すように、説得を試みてくる。

「もし、美雪さんがここを出て事件に巻き込まれでもしたら……。おじ様は、心配で夜も眠れません」

「おじ様……」

「ねえ、美雪さん。お願いですから、私を頼ってはくれませんか？」

彼にはお世話になった。感謝をしてもしきれないほどだ。

あの日、倒れた私を介抱してくれ……。結果的には、家に帰らなくてもよくなった。間接的にはあるが、二度助けられたことになる。そんな相手に、何も言わずに去るのはかえって失礼になるだろう。私は、覚悟を決めて彼らに話すことを決めた。

「ずっと父と二人きりで暮らしていたのですが、一年前に父が再婚して新しい家族ができました。

でも、事情がありまして……。就職を機に家を出ようと考えていたんです。でも、家を出ることができなくなりました」

そこで視線を落とす。入社できなかったことが心に重くのし掛かっているようで、現実を口にするだけで苦しい。

それに、肝心なことはやはり言えなかった。誰かに助けを求めた方がいいはずなのに、どうしても『あの人』からの恐ろしい執着心が枷となっていて口に出せない。『あの人』が彼らに危害を加えてしまうかもしれないという恐れが先立ち、怖くて言い出すことができないのだ。キュッと唇を噛みしめたあと、顔を上げて二人を見つめた。

「本当は私もあの日、シャルルドリンクの入社式に出席するはずでした。ですが、どうしてか入社辞退届を出されていて……。私の入社は、ないものとなっていました」

「……それで、あの場所において何時間もうちの会社を見ていたのですね」

「はい」

おじ様は納得したように頷いたあと、視線を落とした。

その様子を見る限り、あの時点で私が入社できなかった新入社員だということは知らなかったよ

うだ。私の身元もわからないのに、心配して声をかけてくれたのだろう。ありがたくて、我慢しきれなかった涙が頬を伝う。慌てて手で拭うと、目の前にハンカチが差し出された。顔を上げると、今も眉間に皺を寄せている恭祐さんがいつのまにか立ち上がり、ハンカチを手渡してきている。それをありがたく借りて、ハンカチで涙を拭う。

彼は再び腰を下ろし、声をかけてくる。

「働く場所もない今、君はどうするつもりなのか。家に帰るのか？」

「一度、帰るしかないと思っています」

本当は帰りたくなんてない。だが、今の私には行く場所がない状況だ。とりあえずは家に戻り、父には正直に今回の顛末を話さなければならぬだろう。

そして、家に戻ったら就職活動のやり直しだ。あれだけ苦勞して就職活動をしたのに、振り出しに戻ってしまった。やるせない思いが心に影を落とす。

落ち込む私を見て、彼らも困惑している様子だ。自社に入社予定だった女性が、何者かによって勝手に入社辞退をされてしまった。その事態を、特に恭祐さんは重く受け止めている様子だ。腕組みをして眉間に皺を刻んだあと、彼は低く唸る。

「どうして、入社辞退届が……」

私は、肩を落として首を横に振る。

「私は、辞退を申し出てなんていません。入社することを楽しみにしていたのに」

悔しくて、言葉を吐き出しながら涙声になってしまう。入社式の時、私の応対をしてくれた人

事部課長に説明されたことも付け加えて話した。ハンカチをギュッと握りしめていると、恭祐さんが重く嘆息する。

「それだけ辞退をしたという証拠が残っていると、君が反論したとしても通らないだろうな」

「そう、ですよね」

コクリと頷くと、恭祐さんは眉間の皺をより深く刻む。重苦しい空気の中、彼は再び息を吐き出した。

「君に覚えないのなら、誰かがなりすまして辞退を申し出たのだろう。昨今なりすましの件は問題になっているからな。オヤカクをする会社もあるというし」

「オヤカク？」

「親に確認を入れることだ。ご子息、ご息女が入社しようとしています。異論はありませんかと彼らの親に確認を取ることを言う。あとで揉める元にならないように」

そんな問題もあるのか、と目を丸くする。入社までに色々問題が起こっているのは、どうやら私だけではないようだ。

「シャルルドリンクでは、今まで君のように誰かがなりすまして入社辞退を申し出てきたという例は一度もなかった。だからこそ、人事部としても対応には困ったことだろう」

おじ様も隣で大きく頷いたあと、「事情はわかりましたが……」と話に入ってきた。

「弊社に落ち度があったという可能性も捨てきれませんよ」

「おじ様」

「少しだけ時間をいただけませんか？ 美雪さん。これから調査をしてみますから」
ダメ元ではあるが、お願ひしたい。おじ様を見て、大きく頷く。

「よろしくお願ひいたします」

深く頭を下げる。そんな私を見ておじ様は何度か頷いたあと、カバリと笑って提案をしてきた。

「さあ。ここからが、ここにお呼びだてした本題です。美雪さん」

「え？」

入社辞退のなりすましについて調査してくれることに感謝していたのだが、まだ何か相談事があったのだろうか。首を傾げると、おじ様はニコニコと朗らかな笑顔を崩さずに言う。

「美雪さんは、ご実家に帰りたくないのですよね。でも他に帰る場所がないから帰るつもり。そうですね？」

「はい」

「お父様との関係は良好ですか？」

「え？ はい。仲はいい方だと思います」

突然父の話を聞かれたので、慌てて返事をする。脈絡があまりになく、ますます疑問を抱く。

訝しげにしている私を見ても、おじ様の表情は変わらない。大企業のトップとしての威厳を含みつつ、ただ、柔らかくほほ笑んでいる。すっかり気を許していると、柔らかい声で質問された。

「それでしたら、今回のことはお父様にはなんとお話しされているのですか？」

一瞬、返事に悩む。だが、正直に伝えることにした。

「実は……嘘をついています。きちんと入社できて、同期のマンションに滞在させてもらっていると「なるほど。それで、お父様からはなんと返事が？」

「わかりました、と。荷物を送ってもらいたかったら言いなさいと連絡がありました」

素直に話す私を見て、彼は頷きながら顎に触れて何やら考え事をしている様子だ。

「お父様が心配されないように嘘をついているということですね。それなら、そのまま嘘をつき続けましょう。安心してもらうためにも、少々フォローはしないとイケませんが」

きちんと正直にすべて話しなさいと注意されるかと思っていたので、ポカンと口を開けてしまう。まさか、そんな返事が来るとは思っていなかった。おじ様は私をジッと見つめながら、提案をしてくる。

「と、いうことで。美雪さん」

「は、はい」

「調査が終わるまで、この家で家政婦をしませんか？」

「え……？」

呆気にと取られていると、彼は笑みを浮かべたまま続ける。

「お話を聞き限りお父様との関係は良好。ご実家に帰りたくない理由は、新しい家族と折り合いが悪いからなんですよね。となれば、美雪さんが家に帰ることによりお父様が新しい家族と板挟みになる可能性が出てくる。その点も美雪さんが家に帰ることを躊躇している原因だと思っておりますよ」

「……はい」